

漁業のための伝統的な仕事着

釧路の漁業は重労働で、特に厳しい冬の時期はそうでした。近代的な暖かい布が手に入るまで、漁師たちは、「刺し子」と呼ばれる短い上着（この地域では「どんざ」とも言う）を着て保温につとめていました。この上着の名前は、「刺し子」という縫い方から来ています。この縫い方は、藍染めの綿や麻の布を重ねて縫い合わせるのに使う、なみ縫いの一種です。これらの上着には縫い目による模様があり、実用的であるとともに飾りにもなっていました。それぞれの上着は、一家で代々受け継がれていきました。

上着の「刺し子」は着物のような形をし、体の熱を逃がさないように布を重ね、袖口は細くなっていました。次の年の漁期に備えて、冬の間にこの「刺し子」を作ったり修繕したりするのは通常、漁師の妻の仕事でした。北海道で「刺し子」が一般的だったのは、江戸時代（1603～1867 年）から、輸入された毛織物と綿のフランネルが広まった明治・大正時代（1868～1926 年）までです。